

基隆湾沿岸における考古学的調査*

金 関 丈 夫・国 分 直 一

Archaeological Researches in the Area of Keelung Bay

By

Takeo KANASEKI and Naoichi KOKUBU

Archaeological remains consisting for the most part of stone tools and potteries in the area of Keelung Bay were known in the older days of the Japanese reign already.

In the war-time, in August, 1943, four shell mounds on a very small scale were found on a stretch of the shore of Ta-sha Bay. Among the modern Chinese ceramics from the shell mounds, there was one piece of Ketagalan sherd.

The evidence adduced from these findings is, as we believe, sufficient to show that the shell mounds belong to those of some modern days after Chinese ceramics were abundantly introduced into the district where the aboriginal Ketagalan people lived.

However, the land behind the shore where also some shell mounds were found seems to have been an ideal place for the ancient settlers. We actually found a lot of Ketagalan sherd fragments around the area behind Ta-sha Bay.

It is said that the Quimory village of a Ketagalan tribe was located around the Tasha Bay district. So, the finds from the land behind the Ta-sha Bay seem to provide an actual evidence indicating a former site where Quimory people dwelt.

In September 12, 1945, we made an archaeological research in Shê-liao Island located just at the mouth of Keelung Bay and found a stone cist on the northern shore near the beach. Associated with the stone cist, Ketagalan sherds and Chinese ceramics were unearthed. Judging from the finds, it seems quite natural to consider that the stone cist was made by some of the Quimory people. However, according to some Chinese documents, exposed burial was said to have been their original way of burial, and jar burial appeared after Chinese people came to dwell with them.

Such being the case, we can't help concluding that the burial in a stone cist was introduced into the Quimory district from the coastal district of Eastern Formosa where the stone cist burial has been practiced since the prehistoric period.

* 水産大学校研究業績 第493号1967年1月31日受理
Contribution from the Shimonoseki University of Fisheries, No. 493
Received Jan. 31, 1967

I 基隆湾沿岸の地形と採集資料

基隆湾は陥没による小さな湾入であるが、日本時代の築港によって、巨船を入れるに支障がない港となっている。いうまでもなく築港以前の湾岸の状況は現状と著しく異なっている。築港のために浚渫と部分的には埋立てが行なわれ、岸壁の築造が行なわれているからである。これらの工事が行なわれる以前は湾内奥の海辺も、大沙湾から八尺門にかけての海岸のように、点在する岩礁とその間を埋める砂浜から成っている。1884年、清仏戦争の際 A.A.P. Courbet 提督の軍によって測量製作された基隆港図や1913年9月23日に台湾総督府基隆所長の川上浩二郎博士が基隆要塞司令部に検閲申請を行なった際の附図「築港竣工後の基隆港平面図」にややその状況が示されている。すなわち水辺には貝類の生産に富む岩礁と砂浜があり、背後には湾をとりまく丘陵地に沿い、狭長の沿岸低地がある状況がよみとられる。

丘陵地は現在旭ヶ丘等に見られるように、緑に覆われていたと思われる。この地方が古く原住民族によって占拠されていたことは、早くヨーロッパ人にも知られている。1626年5月11日、イスパニヤ人 Antonio Carreño de Valdes の率いる一隊が基隆湾にきている。その後、オランダ人の調査も行なわれている。

中国の記録では古くは方輿紀略に、比較的近世のものでは台海使槎録（雍正2年刊）にも伝えられている。その蕃社は西蘭時代を通して Quimory あるいは Quimorie として知られ、中国人には鷓籠社として知られていたものである。その位置としては、故移川子之蔵教授は「当時蘭人の作成に係る見取図より推考して、今日の基隆大沙湾付近か、もしくは幾分基隆よりの海岸、とにかく基隆港の東岸に存在することは明らかである」と述べている*1。この Quimory 社、すなわち鷓籠社はその後衰頽し、四散するものが多く、社は亡んだが、その一部は早くから社寮島に移り住んだと見られている。しかし現在の社寮島では旧社の跡さえ不明となっている。湾内奥の部分に至っては港埠と市街の建設のために往時の面影をとどめず、その地区においては遺跡が存在したとしても、その発見は殆んど不可能に近い状態である。かかる事情もあって、基隆湾岸地方の考古学的調査は極めて初歩的な状態であり、世に問われた報告は石坂荘作、宮本延人両氏の共著「基隆附近の石器」*2 と河合隆敏氏の「基隆大沙湾の貝塚」*3 があるに過ぎない。石坂、宮本両氏の報告によると、石器散布地は旭ヶ丘のような丘陵地帯と平坦地の海岸近くの市街地、社寮島方面であって、出土品は土木工事の際の偶然の発見によるものであるとされる。両氏の報告によって、次のような出土品が明らかにされている (Plate VI参照)

1. 大形石斧 (断面レンズ状) — 1 真砂町 地下10尺
2. 有肩石斧 (砂岩質) — 1 大正町 (手網港)
3. 同 上 — 1 社寮島
4. 錘 石 — 2 同 上
5. 槌 石 — 2 同 上
6. 方角片刃石器 (スレート) — 2 白燈台万人堆羅漢石附近
その中1は背部に微弱なステップを有している。
7. 樹皮叩き石 (bark cloth beater) — 1 滝川町第4小学校敷地地下約1m同上
8. 有肩石斧 — 1 同 上

以上の発見資料中、白燈台万人堆羅漢石付近採集の方角片刃石器2は平山勲氏発見のものであるが、他はすべて石坂荘作氏採集品である。以上の他に、基隆において孤児のために愛憐園を運営していた鈴木民部氏のコレクション中に若干の石器が見出された (Plate VII Fig. 1, 2, 3参照)。

1943年には大沙湾に小貝塚が発見され、戦後1946年に社寮島において組合わせ石棺が発見された。それらの調査は戦争末期から戦争終結直後にかけての多難な時期においてなされたものであるから、不十分なも

のではあったが、当時作った記録は、基隆湾沿岸地方の調査研究の進捗を見せてない今日、なお何んらかの意義をもつかと考える。

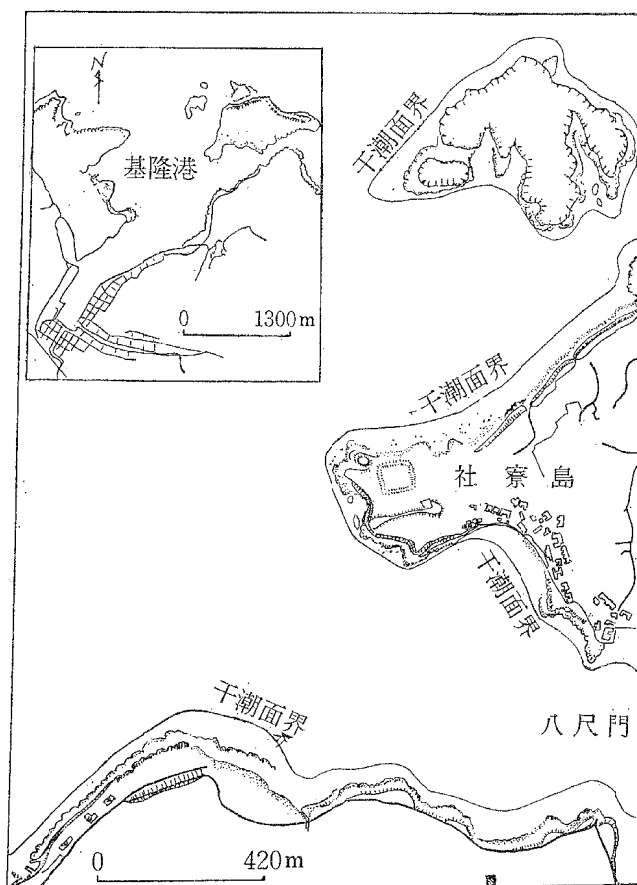


Fig. 1. Map of Keelung Bay.

Ⅱ 大沙湾の近代貝塚

基隆駅頭より岸壁沿いに東行、社寮島に至る途中、クルーベー浜海水浴場の東側に位置する大沙湾海辺において、1943年夏、当時台北師範学校の学生であった河合隆敏氏が貝塚を発見した。この報告により、筆者らは同年9月12日A、B、C、D4カ所の貝塚の中、A、Bの調査を行なった。調査メンバーはわれわれの他に金関恕（当時台北大学予科学生現天理大学講師）、福田百合子（当時台北大学解剖学教室勤務）、河合隆敏、松尾静夫（いずれも当時台北師範学校学生）の諸氏である。

貝塚の発見された地区の地形は基隆港築港誌および同誌附図（前出）によって見ると、築港開始以来、調査当時に至るまでほとんど地形の変改が加えられていない地区である。その地区は岩礁と岩礁の間にはさまれた狭小な砂浜にして、日本時代に真砂ヶ浜とよばれていた。この真砂ヶ浜の北辺、海岸道路下の崖面（満潮時の汀線から10m）に4カ所にわたって、極めて小規模の貝層が露出していた。西から東へ、A、B、C、Dと4貝塚があったが、いずれも小残跡で、その規模の比較的大きいものでも、径2m、厚さ30cm程度のものであった。それらは別個の貝層を示していたが、表土の厚さ、貝層の厚さ、貝の風化の状況、遺物の包含状況から考えて、明らかに同時代に形成された相互に関連ある貝塚と考えられた。われわれは比較的

大きいA, Bの残跡を発掘した。表土の厚さはA, Bともに70 cm あったが, その上部約30 cm は道路工事の際に被覆するに至った新しい土壌であった。

貝層の厚さはA, Bともに約30 cm, 奥行は60 cm に過ぎない残跡であった。貝の種類はAは巻貝を主とし, Bはカキを主としていた。

遺物について見ると, 表土および貝層中に包含されていた土製品はいずれも近代中国陶片である。

無釉の暗褐色陶片, 有釉の暗褐色陶片が見出された。先史系土器はBからは全く発見されず, Aにおいては貝層を掘り下げた際, 岩盤上にわずかに条痕を有する灰褐色土器1片がえられた(Plate I Fig. 6 参照)。それはケタガラン族の土器に酷似している。すなわち, ケタガラン系の遺物散布地の上に登場した近代の貝塚とすることができよう。

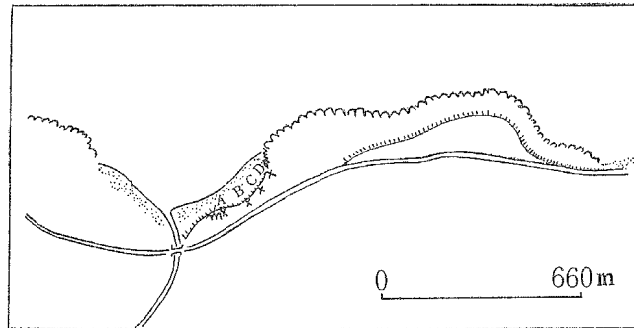


Fig. 2. Map of Ta-sha Bay, Keelung, locations, A~D, indicating the distribution of the shell mounds.

付近の状況を見るに, 貝層のある海岸道路を越えると住宅地帯となる。この地区は直ちに旭ヶ丘の丘陵に接続する。この住宅地帯において, 防空壕を掘った際(1943年頃) しばしば薄手の印文土器が発見されたと伝えられている。印文土器は近代中国陶片と混在して発見されたとされる。筆者らも防空壕壁面において実見することができた。それは石坂荘作氏によって採集され, 基隆郷土館に収蔵されていたケタガラン族の土器, 台大土俗学教室に所蔵されていた同族の土器に酷似している(Plate III Fig. 2 参照)。すなわち, 灰色ないし灰褐色, 赤褐色の色調を主体とし, 僅々微砂を混じ, 概して薄手の土器である。器形は僅かに外反する口縁をもち, 底部は円底を示している。いわゆるケタガラン系土器である。

したがって, ケタガラン系先住民が旭ヶ丘緑地帯から真砂ヶ浜海区にかけて居住していたと考えてよいように思われる。これを上述の故移川教授の研究に照合するに, これらの遺物は Quimory 社人によって遺されたものであろうと考えられてくる。上述の貝層は Quimory 社人が完全に熟化して, 印文土器の製作をやめてしまった後のものか, あるいは Quimory 社にとってかわった漢族系住民によって遺されたものか, そのいずれかを示すものであろう。

Ⅲ 社寮島の組合わせ石棺

社寮島は第2次大戦中は軍事的要地として, 踏査できなかつたが, 終戦後, 1947年5月をはじめ踏査する機会をえた。

基隆地方一帯の海岸は軟弱な淡赤灰色の粘土質砂岩と, これよりはるかに堅硬な石灰質砂岩の互層から成っているが, 社寮島の海岸地帯では粘土質砂岩の中に石灰質砂岩が Nodule として存在している状況が見られる。

社寮島は東部においては台地性地形が水蝕により分断されて、若干の谷地を形成し、樹林に埋められているが、西半部は低平な地形を示している。居住地区は基隆湾に面した南西海岸地帯に見られ、台地以西の低平地帯に発達している。イスパニヤ時代の城址はその西北隅に見出される。石坂荘作、鈴木民部両氏による採集は台地以西の低平地方においてなされたものときいた。われわれは、同島西北角に基隆港を厄するようにつくられた防波堤付近から東へ約 40 m の地点にケタガラン系土器と中国陶片の混存する包含層と石棺の石組みとを発見した。

干潮時、汀線までの距離 10 m に過ぎないほどの海岸地帯で、付近には殻頂部を破碎された巻貝類をおびただしく包含する層も見られた。

この地点から東行、約 20 分にして、平坦な海蝕地形がある。海蝕地形にいたる直前の道路断面にも、ケタガラン系土器と近代中国陶片の混存する包含層が見られた。石棺地点を A 地点、海蝕台地直前の包含層地点を B 地点とする。B 地点においては半磨製および打製の石斧がえられた。

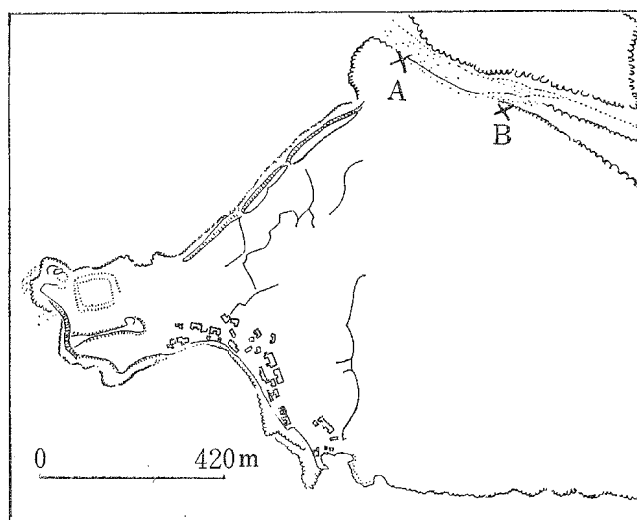


Fig. 3. Map of She-liao Island, Keelung.

A : The site where the stone cist was found.

B : The site where the prehistoric artifacts were found.

A 地点は、1947年5月26日に発掘調査を行なった。メンバーは筆者らの他に川平朝申、金城順亮2氏。当時は終戦直後で、同島は日本軍に代った中国軍兵士の管理下にあった。したがって写真撮影は困難であり、測量機械を使用しうる状況でもなかった。かかる状況下にあつて、われわれは層序を注意しつつ、遺物の状況を確かめ、石組みの構造を調査した。

石棺上面までの表土の深さは約 25 cm。石棺を覆う蓋に当たる石材は見出されなかった。棺底をなす板状の長方形の石材を囲んで、端側の板状短形の石材2、側壁の一部をなす板状長方形の石材1が原位置のまま見出されたが、他の部位をなす石材は付近に散在していた。

棺底までの地表からの深さ約 60 cm。遺物は棺底下 25 cm に及んでいた。

発掘は棺面まで、棺面から棺底まで、棺底から遺物包含層の下限までとわけて行なった。表土から遺物包含層下限までは黝色を示し、その間に層序は見出されなかった。次表は上述の3区における遺物の集計である。

A 表土(地表から石棺上面迄(0~25cm))中の遺物

- | | |
|--------------------|---|
| 1. 灰褐色土器片(混砂)(口縁部) | 2 |
| 2. 灰褐色印文土器片(混砂) | 7 |

3. 赤褐色印文土器片(混砂)	2
4. 灰黒色(混砂)土器片	3
5. 飴色有釉の中国陶片	34
6. 褐色無釉の中国陶片	25
7. 白色磁器片	3
8. 青磁片	1
9. 近代中国瓦片	7
10. 無色ガラス片	2
11. 青色ガラス片	1
12. 鉄屑	5
13. スレート片	3
14. 獣骨片	1
B 棺面から棺底迄(25cm~60cm)	
1. 灰黒色(混砂)土器片	3
2. 灰色もしくは灰褐色土器片	3
3. 飴色有釉の中国陶片	26
4. 褐色無釉の中国陶片	46
5. 緑色有釉の中国陶片	1
6. 白磁片	5
7. 青磁片	1
8. 草色ガラス片	1
9. 鉄片	2
10. 獣骨	2
C 棺底から遺物包含層下限迄60cm~85cm	
1. 灰黒色(混砂)土器片(20片中18片は印文をもっている)	20
2. 灰色もしくは灰褐色(混砂)土器片(10片中5片は印文をもっている)	10
3. 飴色有釉の中国陶片	78
4. 白磁片	9
5. 青磁片	2
6. 石炭塊	6
7. 鉄片及び鉄屑	2
8. 獣骨	4
9. スレート片	1

以上において記載した灰色, 灰黒, もしくは灰褐色の印文土器は明らかに先史系土器にして, 上述の大沙湾出土の先史土器片に酷似している(Plate IV 参照)。石器がまったく発見されず, 近代中国日常用陶磁器片が先史系土器と混存している状況も注目すべき状況である。遺物包含の状況から見て, 中国陶磁器の混用が進むに至った近世におけるケタガラン族系の遺跡であろうと見られる。

石棺材を構成していたと考えられる石材はすべて淡い赤灰色の砂岩である。社寮島の基盤をなす軟弱な砂岩を切りとったものであろうと考えられる。

石棺の一部は海蝕による地形変形のために低位置に崩壊解体して分散したと見られるが, そのために失われた石棺材もあると考えられる。a~i の石材についての実測値を示すと次のごとくである。

	縦	幅	厚
a	94 cm	37 cm	10 cm
b	33 cm	25 cm	7.5 cm
c	93 cm	35 cm	8.8 cm
d	47.6 cm	27.2 cm	6.4 cm
e	53 cm	31 cm	7 cm
f	57.5 cm	30.8 cm	8.5 cm
g	50 cm	29 cm	7.5 cm
h	30.5 cm	28.3 cm	9 cm
i	26.5 cm	18.5 cm	5 cm

以上の中、原位置のまま、動いていないと見られるのは、e, g, h, i の4個の石材である。g, h は端側を形成していたと見られ、e は側壁、i は底部の一部を構成していたと見られる。これらに対応するものとしては、石材の縦、幅、厚さ、その散布位置から見て、e 側壁に対しては、f が対応、f に続く構造としては c が考えられるであろう。b, d の位置は不明である。棺蓋をなす石材は海蝕による崩壊が進んだ時期に矢われたものであろう。

完全な資料とはならないが、われわれは以上の状況を通して、社寮島の先住民の間に比較的近代まで、組合せ石棺埋葬が行なわれていたものであろうと考える。

この石棺を遺した住民がケタガラン系住民であることは土器の上から推定されるところであるが、大沙湾付近にあり、幾分、基隆よりの基隆港東岸に存在したと見られる Quimory 社との関係は如何に考えられるであろうか。故移川子之蔵教授は Quimory 社は衰頹四散するに至ったが、その一部は早くから社寮島に移り住めるものあり、日本領台頃まで亀霧社と称していたものらしいことを明らかにしている。1920年頃にも社寮島に平埔族の残存せるもの100余人を数えることができたときれる。その居住状況は乾隆6年の台湾府志(初修)によると「其地以在大海中欲至其地必先举烽火社蕃駛艚舸以渡」とあることよりすると、社寮島は八尺門をもって本土と隔離されているので、艚舸即ち独木舟をもって本土と連絡していたことがわかる。上述の石棺が、漢族系移民が基隆湾岸において居住地域を拡大しつつあった時代にケタガラン系住民によって遺されたことは今や疑いえないところであるが、ケタガラン系住民は如何なる葬制を伝えていたものであろうか。光緒戊子(1888年)に台湾府学となった陳洛書は島人大投によって聞書を作成している。その聞書によると、康熙年間に「二十家男女六十余人」あったときれる。そして、その葬制については、次のように述べられている。

古時人死 則將死者置之木板 移于林間或山下任其腐敗 厦將家中器物家資如家中 十人則作十份 分一份與死者棄之死人之旁 至後数十年漢人與之雜處 始有埋葬用瓦器大缸乘貯死人埋之戶外 而家業不分與死者 今則同漢人埋葬無異

瓦器大缸は土質の大甕と見られるから、甕棺埋葬が漢族の影響によって登場したと見られる。

とするなら組合せ石棺の埋葬はいかに考えてよいものであろうか。

紅頭嶼のヤミ族においては木板を組合わせて死者をおさめ、砂中に埋葬する方法と、巖頭に曝葬する方法とがある。ただし後者の場合にも、木板に載せ、嚴重にはではないが、木板で囲む。埋葬でなく、曝葬である点が相違する。

組合せ石棺埋葬は火燒島にも見られ、台湾本島東海岸においては南北にわたって見出される。

上述の陳洛書の聞書が一般的な葬制を伝えているとすれば、組合せ石棺埋葬は東海岸先史系の葬法が登場、しかも漢蕃交渉の近代に存在したことを語っているわけである。

Ⅳ 基隆湾岸地方の文化層

従来知られている有肩石斧, 方角片刃石器等の他に, われわれは社寮島の A, B 両地点の中間地点で有段片刃石器を採集した。なお, A 地点に近い丘縁において, 赤色粗面の先史系土器を採集した。台北盆地の円山貝塚の様相から見て, 赤色粗面土器と有肩石斧, 方角片刃石器, 有段片刃石器は共伴するものと考えてよかろう。おそらく, 先史円山系文化が基隆河をさか上って, 基隆湾岸地方に延びていると考えてよいと思われる。

印文土器はいうまでもなく, 後の文化層である。大沙湾貝塚の後背地区も, 社寮島の石棺も薄手の印文土器と近代中国陶磁片とを包含することから見て, 近代漢蕃交流時代の遺跡であり, おそらくは Quimory 社系の遺跡と考えられた。

台湾北部海岸地方の薄手印文土器の源流は新竹県苑裡地方に発すると我々は考えている。

社寮島の石棺地区で採集された印文土器の中には, 火度の高い極めて薄手の後期黒陶が存在していることは興味深い (Plate II Fig. 3,4 参照)。この種の後期黒陶は新竹県苑裡貝塚において, 印文土器に共存して登場している。

この種の後期黒陶は台湾東海岸においてはタツキリ溪口の遺跡に登場している。この遺跡は灰色乃至灰黝色の薄手印文土器を主体とする遺跡である。僅かに砂を混じるその胎土, 焼成, 器形, 印文の文様から見て, 基隆湾岸の印文土器に酷似している*4。ことに社寮島の印文土器は後期黒陶を伴う点において, その近親性の強さを想わしめるものがある。

基隆湾沿岸地帯に最初に登場した文化は円山貝塚系の文化であったことは, 典型的な有肩石斧や有段片刃石器が発見されていることから推定できる。印文土器の文化層はいうまでもなく後のもので, おそらくは新竹県苑裡貝塚地方から北上した波によってもたらされたものと思われる。

苑裡地方に印文土器をもたらした種族文化はおそらく華南に発しているものであろう。しかしながら, この問題は稿をあらためて後考したいと考える。

Quimory 社は苑裡系印文土器文化の末流を伝える聚落であったと考えられる。その葬制の中に, 台湾東海岸系の組合せ石棺を用いる葬制が複合したと見られる。これらの重層複合の過程は基隆湾岸, とくに大沙湾の後背地区をなす丘縁, 社寮島の丘縁地区の発掘調査を行なうことによって, やや詳細におさえることが可能であろうとする見通しはつけられたが, われわれは間もなくこれら遺跡地方の研究から離れることになった。

*1 移川子之蔵 ケタガラン族の大鷄籠社 科学の台湾 第2巻第5, 6号 (1934)。

*2 石坂荘作, 宮本延人 基隆附近の石器 科学の台湾 第2巻第5, 6号 (1934)。

*3 河合隆敏 基隆大沙湾の貝塚 民俗台湾第4巻第3号 (1943)。

*4 国分直一 タツキリ溪流域地方の印文土器遺跡 水産大学校研究報告 人文科学篇第10号 (1965)。

P L A T E

PLATE I

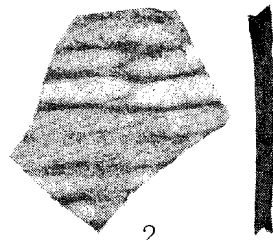
Rubbings of the potsherds with impressed pattern found in Ta-sha Bay district

No. 14 : Pottery fragment found on the bed rock of the shell mound A

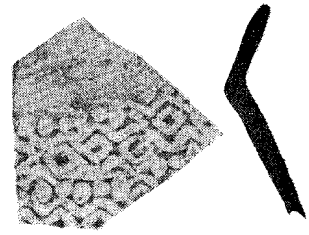
PLATE I



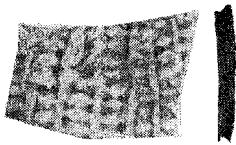
1



2



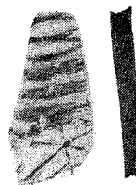
3



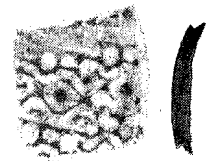
4



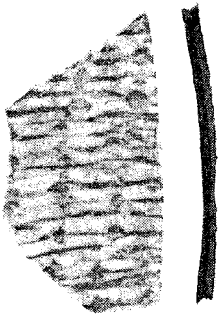
5



6



7



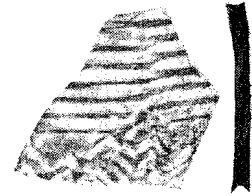
8



9



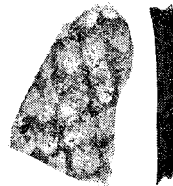
10



11



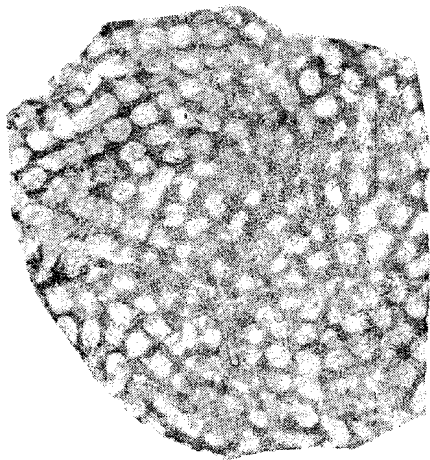
12



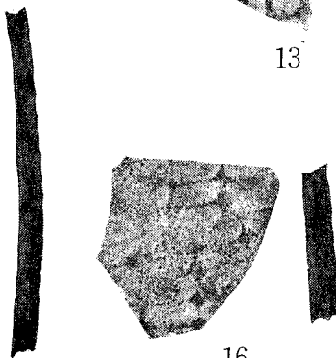
13



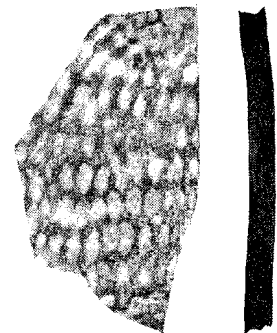
14



15



16



17



PLATE II

Rubbing of the potsherds with impressed pattern on She-liac Island

PLATE II

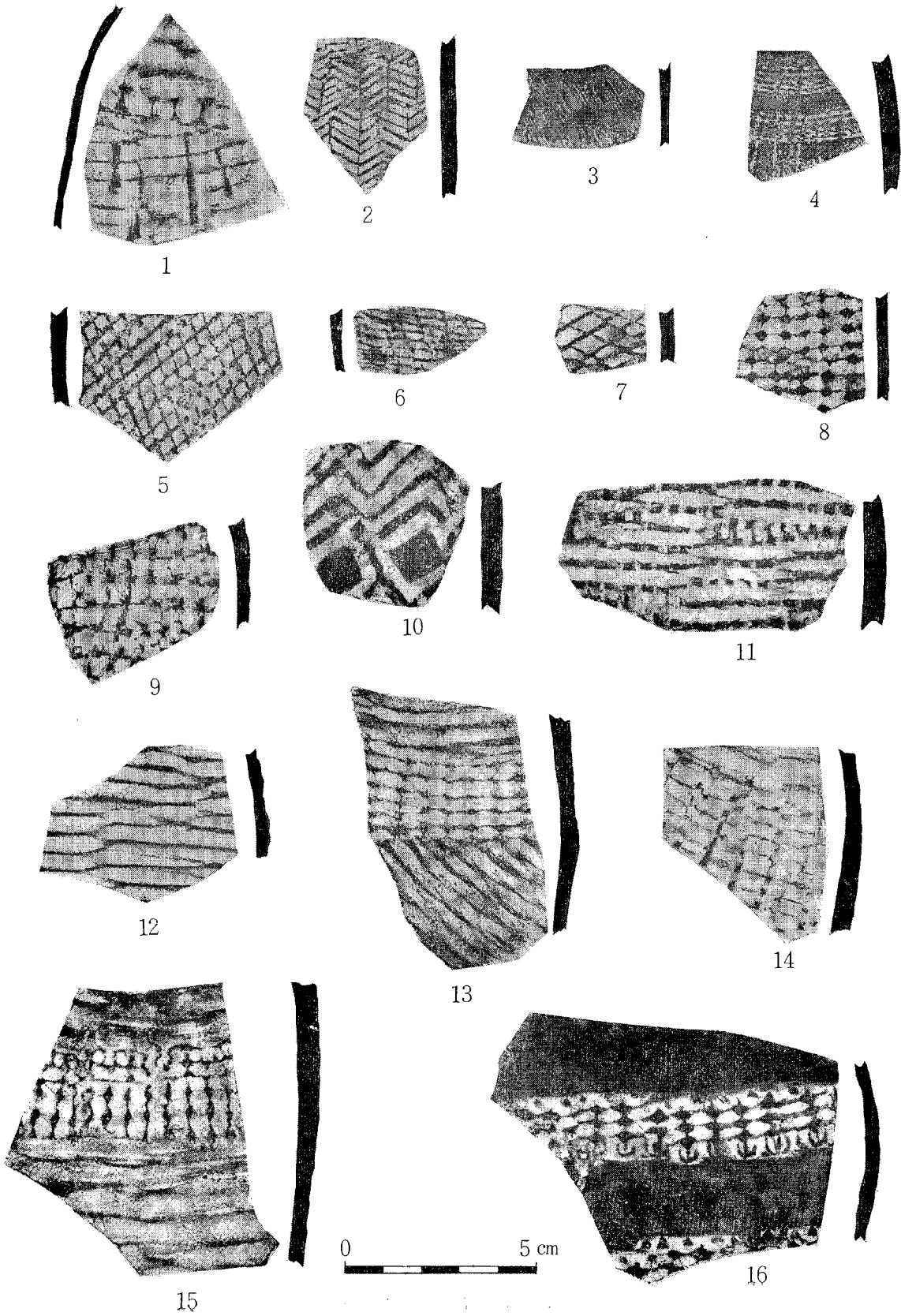
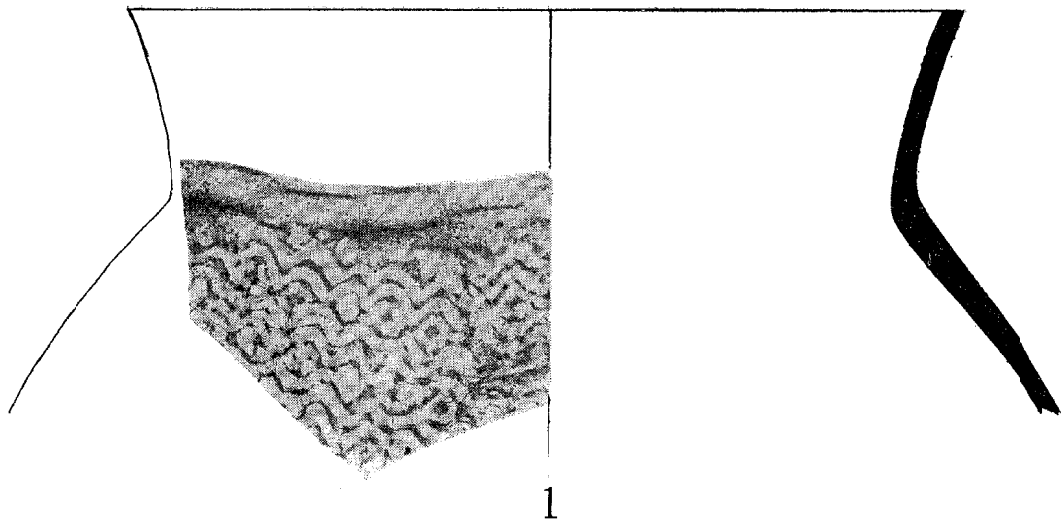


PLATE III

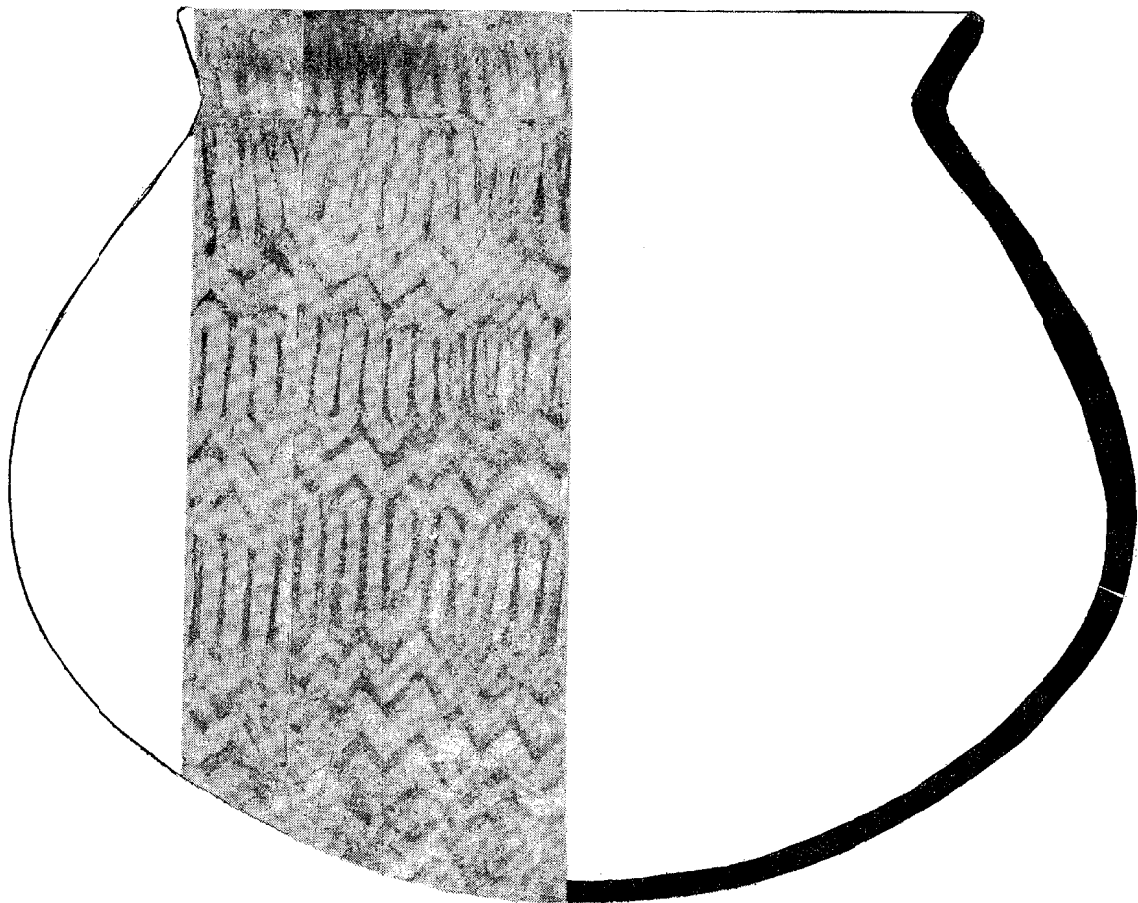
Rubbings of the potsherds with impressed pattern collected in the areas of Ta-sha Bay and
She-liao Island

No.1 : Impressed pottery collected in the Ta-sha Bay district

No.2 : Impressed pottery collected in a certain Ketagalan village (Ethnological Museum,
National Taiwan University)



0 5 cm



2

PLATE IV

Rubbings of the potsherds with impressed pattern found in the stone cist site

Nos. 1~6 The sherds collected in the surface soil

Nos. 7~17 The sherds collected in the soil in which the stone cist was buried (25 cm~ 60 cm)

Nos. 18~36 The sherds collected in the soil below the stone cist (60 cm~ 85 cm)

PLATE IV

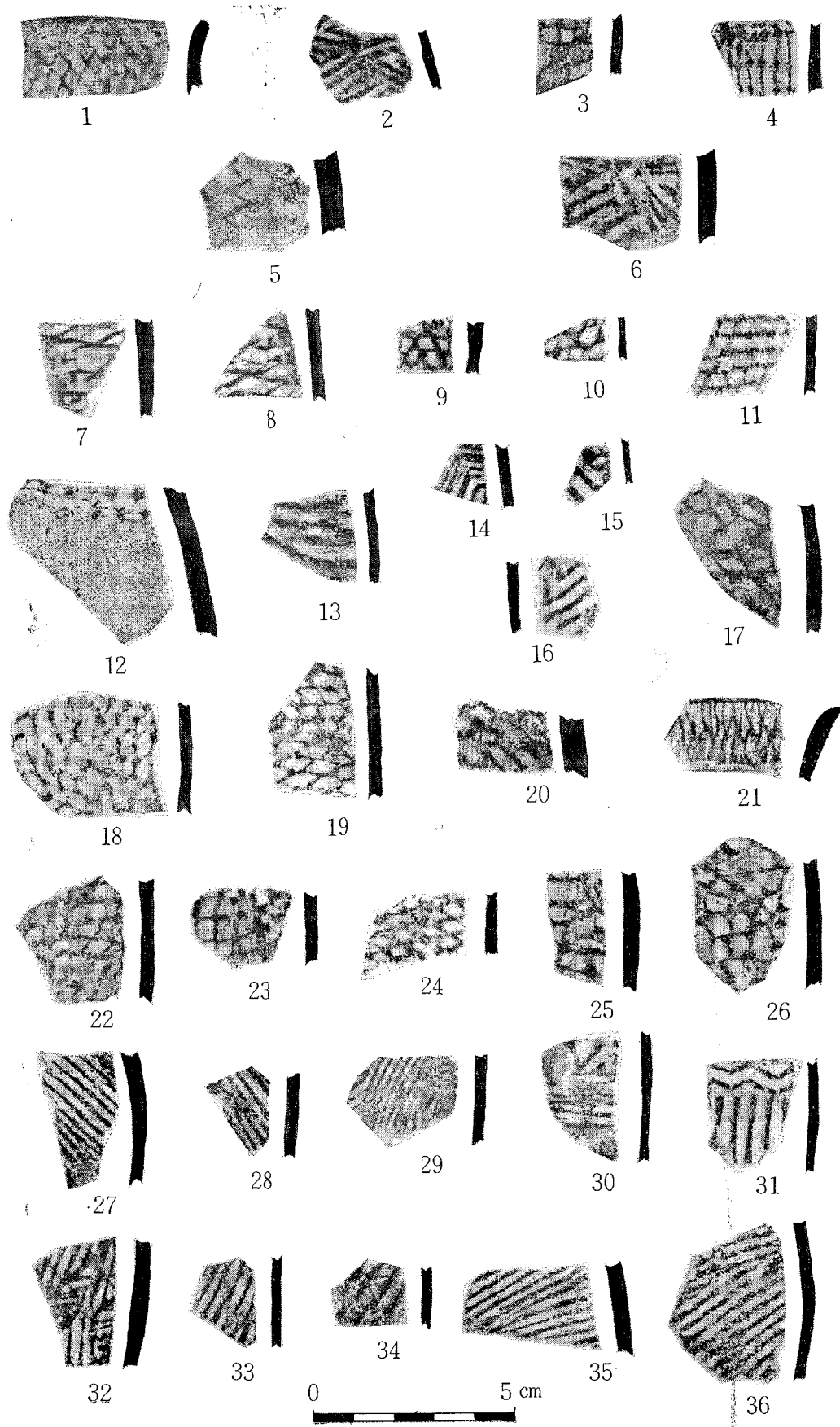
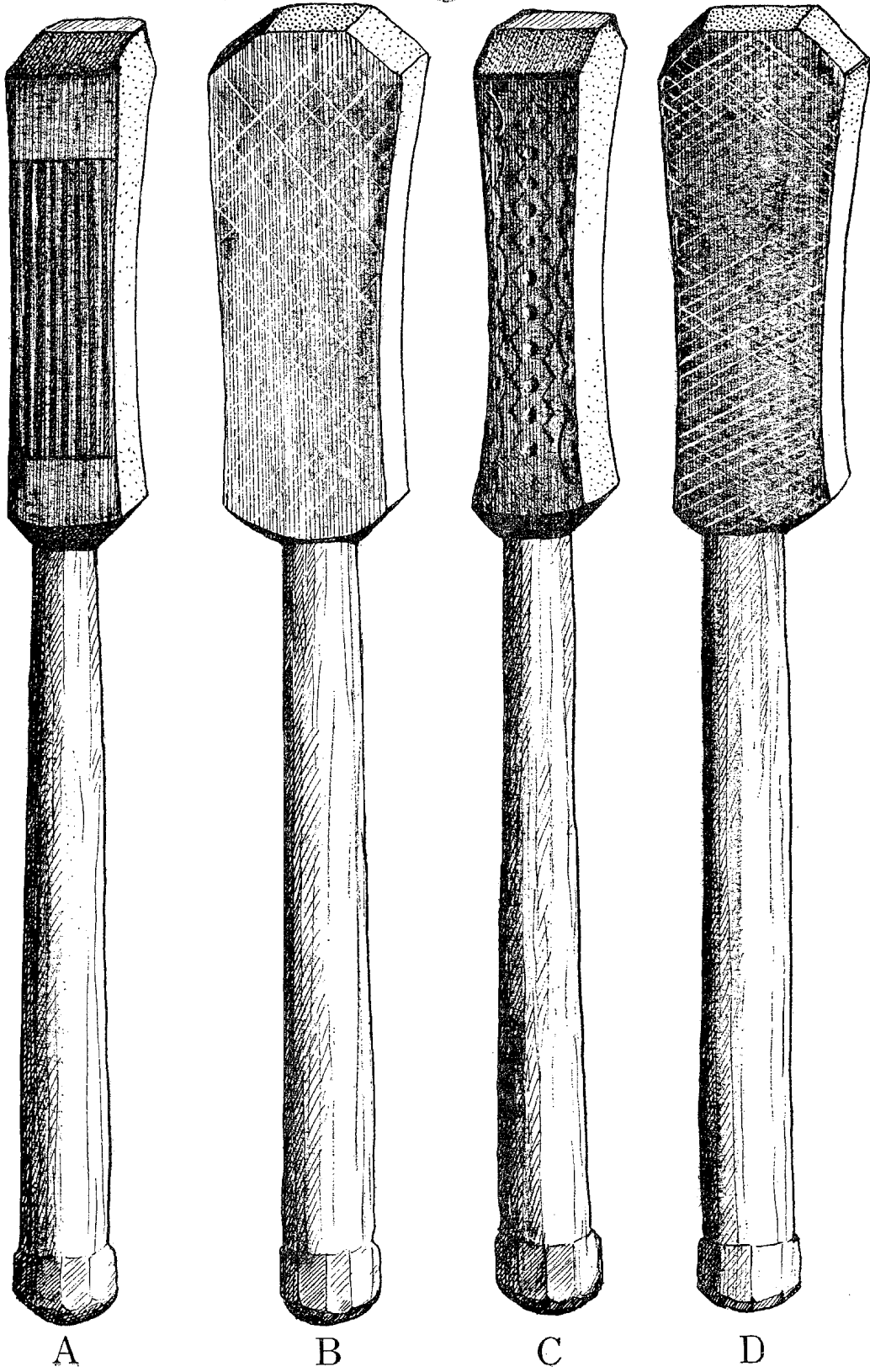


PLATE V

Tapping butt with engraved designs collected in a certain Ketetagan village (Drawing by Prof. Chen Chi-lu, Ethnological Museum, National Taiwan University)



A

B

C

D

PLATE VI

Stone artifacts found around Keelung Bay re-drawn from the paper, "Stone implements found around Keelung" by S. Ishisaka and M. Miyamoto, *Kagaku no Taiwan*, Vol. II. Nos. 5, 6 (1934)

Nos. 1, 2 : Shouldered axes, sand stone

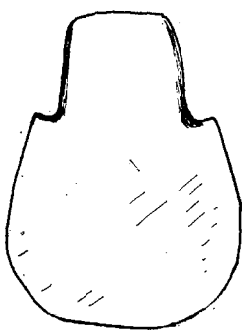
No.3 : Rectangular adze, sand stone

No.4 : Rectangular adze with slight step, sand stone

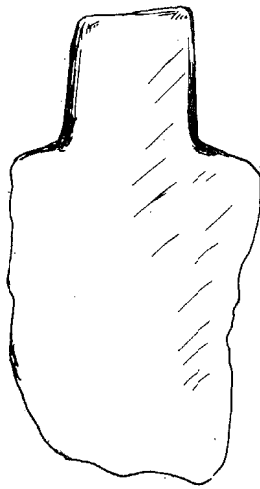
No.5 : Bark cloth beater, slate

No.6 : Stone axe with lenticular section, sand stone

PLATE VI



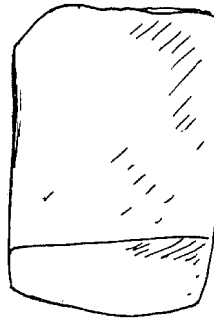
1



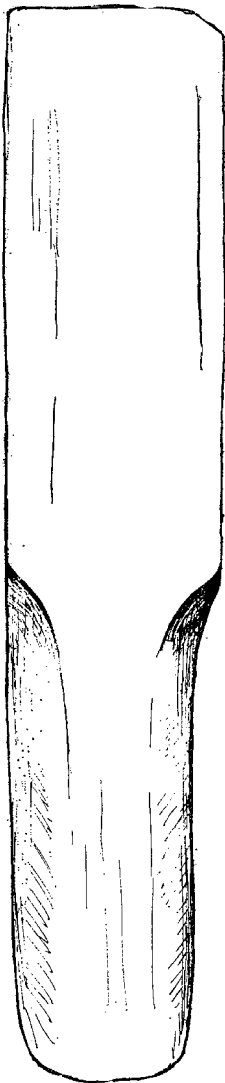
2



3



4



5



0



6

10cm



PLATE VII

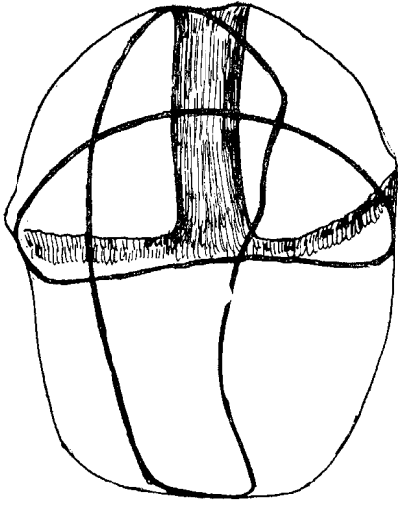
Stone artifacts collected in She-liao-Island

Nos. 1, 2, 3 Stone sinkers, hard sand stone (Suzuki Collection)

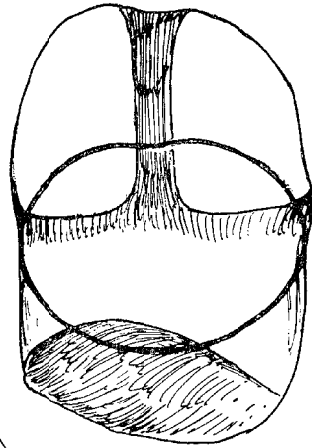
Nos. 4, 5 Stone axes, sand stone in site B

No. 6 Stepped stone adze, schistic stone *ibid*

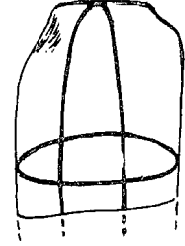
PLATE VII



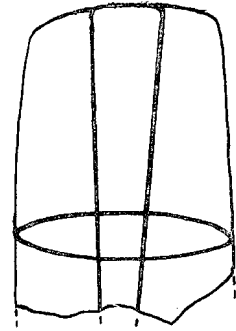
1



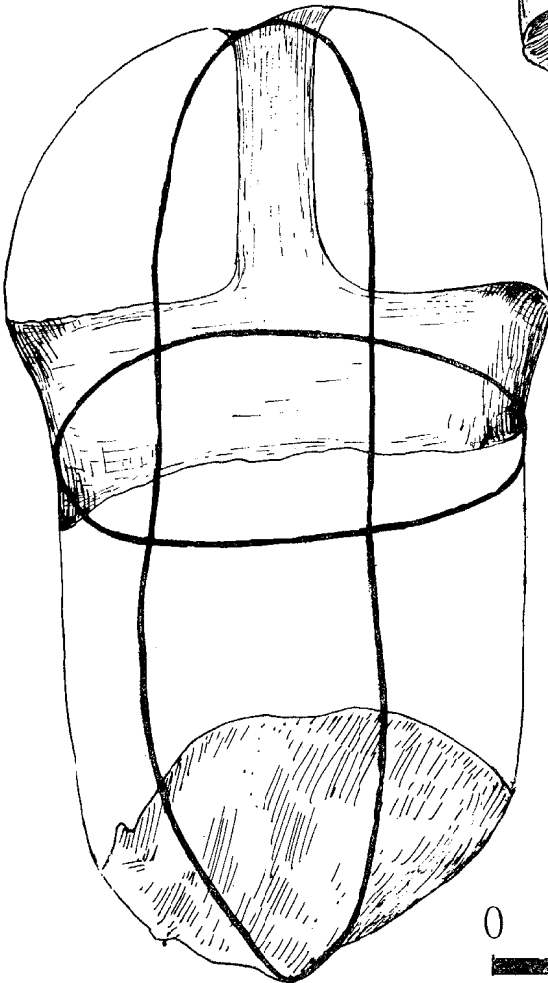
2



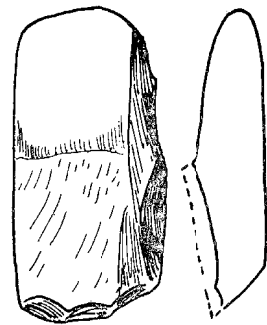
4



5



3



6

